

アドベンチャーカウンセリングの活用実践 — 帝塚山大学文学部での取り組みに関する予備的報告 —

河口充勇 (帝塚山大学文学部)

小西浩嗣 (帝塚山大学全学教育開発センター)

1. はじめに

本稿は、2017年度にはじまる帝塚山大学文学部でのアドベンチャーカウンセリング (adventure based counseling、以下ではABCの略称を使用)¹の活用実践をめぐる、4年目を終えた時点での予備的な成果報告である。

ABCは、個人やグループの行動を変えるために行なうグループカウンセリングの手法を指し、対象者の性格やニーズに合わせて注意深く選ばれた体験学習のアクティビティ²を用いることを特徴とする。ここでいうアドベンチャーは、「こういう自分」という枠から一歩踏み出してみること(「新しい自分」に出会うこと)を、そして、カウンセリングは、個人やグループの成長のための支援をそれぞれ意味している。

つづく第2節では、文学部におけるABCの導入経緯について簡単に振り返る。第3節では、文学部でのABCを活用した様々な取り組みについて概観する。第4節では、文学部でのABC体験に参加した学生たちの振り返りレポートを手掛かりとして、体験が具体的にどのような効果を学生たちに及ぼすのかについて整理する。第5節では、今後の文学部におけるABCの活用実践の可能性と課題について展望し、結びに代えたい。

2. なぜ文学部でアドベンチャーカウンセリングか?

本節では、文学部におけるABCの導入経緯について簡単に振り返る。

この点に関しては、文学部専任教員である河口充勇(本稿ファーストオーサー)の個人的

¹ ABC全般の歴史的背景、理論・方法、本学におけるABCの導入経緯とその後の展開について詳しくは、川合・小西(2009)、小西(2021)を参照されたい。

² ABCには難易度の低いものから高いものまで様々なアクティビティが用意されている。詳しくは、小西(2021)を参照されたい。

な問題意識に端を発している。文学部で教鞭をとるなかで、河口は、対人関係への消極的態度を顕著に示す学生、あるいは、演習・実習系科目の自己紹介において「人見知り」や「コミュ障」と自称する学生に数多く遭遇してきた。それは決して文学部特有の現象というわけではないが、文学部にあっては相対的にこうした学生の比率が高いように感じられる。もちろん、対人関係への消極的態度それ自体を全否定するつもりはなく、それを「群れない」、「一人になれる」ことと捉えるならば、自己の探求や内省力の醸成にとって必要不可欠なものともみなすこともできるだろう。とはいえ、それも度が過ぎると、学びの機会、成長の機会を逸してしまうことになりかねない。

このような状況に対して河口が殊更に問題意識をもつようになったのは、文化創造学科（2014～20年度）の運営に携わったことに起因している。文化創造学科が開設された2014年度、帝塚山大学では新たに「奈良まるごとキャンパス」というキャッチフレーズが掲げられ、全学を挙げて地域連携による教育研究活動が推進されることになった。こうした大学全体の大きな転換のなかで「奈良まるごとキャンパス」の牽引役になることを期待された文化創造学科は、様々な地域密着の学び（フィールドワーク、プロジェクト型学習³など）を学生たちに提供することになった。それはまさに「人と密にかかわる」ことを前提とした学びであり、その可能性を模索するなかで、河口は、個々の学生が自発的に人とかかわりたくなる「仕掛け」⁴の必要性を痛切に感じるようになった。

これに加えて、河口が求めた「仕掛け」は、学生たちの学びへの主体性を喚起するものでもあった。河口は、学科開設から間もない頃より様々な学生参加型プロジェクト（特に注力したのが商品開発プロジェクト）の企画・運営に携わってきたが、そこで直面した課題は、学生たちの主体性を喚起することの難しさであった（河口 2021）。試行錯誤のなかで、河口は、個々の学生が主体的にプロジェクト活動にコミットメントしたくなる「仕掛け」を強く求めるようになった。河口が理想としたのは、それぞれに個性や特技をもつ学生たちが自立

³ プロジェクト型学習とは、プロジェクト活動（何らかの目的の達成のために立ち上げられた期間限定の企画）への参加を通して得られる能動的な学びのことであり、アクティブラーニングや社会人基礎力とのつながりで用いられることが多い。これにより学生たちはリテラシーやロジカルシンキング、コミュニケーション、プレゼンテーション、情報発信などの幅広いスキルを獲得するとともに、学びへの自立性ならびに集団における協調性を高めることになると期待される。

⁴ 「仕掛け学」を提唱する松村真宏によれば、「仕掛け」とは、行動変化を強制するのではなく、魅力的な行動の選択肢を増やすことにより目的の行動に誘うアプローチを意味している（松村 2016）。本稿でもこのような意味で「仕掛け」概念を用いている。

しつつ（「群れない」、教員に依存しない）、ある目標に向かって互いに協調・役割分担する、「自己組織化された共同体」としてのプロジェクト活動であった（ゼミ活動も然り）⁵。

こうした暗中模索のなかで河口が行き着いた有用な「仕掛け」の1つがABCに他ならない。河口は学内公開授業への参加を通して関智子（2014～17年度本学専任教員）と知り合い、関やその後任である小西浩嗣（本稿セカンドオーサー）との個人的な交流のなかでABCの理念と方法について学ぶことになった。

社会学・社会調査・地域研究を専門とする河口がおよそ「畑違い」のABCにシンパシーを覚えるようになったのは、早い段階において、それが個々の対象者に対して自発的に人とかかわりたくなるとともに、主体的にグループワークにコミットメントしたくなるように促す「仕掛け」であることに気づかされたからである。ABCは、短時間のうちに対象者のグループを打ち解けさせ（アイスブレイキング）、快適・安心な居場所、すなわち「コンフォートゾーン（comfort Zone）」に変えるという効果をもつ。さらに、ABCは、チームビルディングや挑戦喚起という点においても大いに効力を発揮する。ここで意味をなすのがABCを象徴する2つの理念、すなわち「フルバリューコントラクト（full value contract）」と「チャレンジバイチョイス（challenge by choice）」に他ならない。前者は、グループ全員の個性や価値観を最大限に尊重すべきであるという約束を意味している。一方、後者は、挑戦するか否かは強制されるものではなく、個々のメンバーが自らの意志で決定すべきであるという考え方を指している。これら2つの理念が共有されるグループ環境（チーム）が形成されることにより、個々のメンバーは「コンフォートゾーン」からさらに一步踏み出す挑戦を喚起されることになる。つまり、ABCにおける「コンフォートゾーン」は、個人やグループの挑戦と成長のための基盤であると考えられている。このようなABCの基本理念は、文化創造学科で河口が思い描いていた教育研究活動の理想像に大いに合致するものであった。

3. 文学部でのアドベンチャーカウンセリングの活用実践をめぐる様々な取り組み

本節では、文学部でのABCを活用した様々な取り組みについて概観する。

⁵ 「自己組織化された共同体」について詳しくは、河口（2007）、河口（2021）を参照されたい。

3-1 正規科目としての導入

2017年度、全学教育開発センター開講科目として「特別講義（アドベンチャー・カウンセリング）」が開設され（担当は関、クラスは複数学部混成、1～3年次配当）、文学部の学生にもABCの学びが提供されることになった。受講生たちは、半期15回にわたってABCの様々なアクティビティに挑戦しながら、自己・他者理解、他者とのかかわり方について学びを深めていった。

翌2018年度には、小西が関の後を引き継ぐにあたり、上記「特別講義（アドベンチャー・カウンセリング）」に代わって「特別講義（人間関係とコミュニケーション）」が開設された。授業内容に大きな変更はなかったが、開講形態が学部ごとのクラス編成、1年次のみの配当（2年次以上は履修不可）に変更された。つまり、科目の目的が学部単位での初年次適応支援に特化するものに変更された、ということである⁶。

3-2 新入生オリエンテーションへの導入

2017年4月、文化創造学科の新入生オリエンテーション⁷においてABC体験（1時間程度、アイスブレイキングに重点）を実施した。この企画に当たり、河口は関にファシリテーターを依頼するとともに、企画内容に関する具体的な要望を出した。文化創造学科は2017年度入試をもって募集停止したため、2017年度生が学科の最終学年となってしまったが、最初のアイスブレイキングが功を奏したこともあって、同学科の先輩たちに比べて、大学生活への適応、人間関係の構築がいっそう円滑に進むことになった。



写真1 文化創造学科の新入生オリエンテーション

⁶ 「特別講義（人間関係とコミュニケーション）」の授業実践に関しては、現在、担当者の小西が論文を執筆中である。

⁷ この年の文化創造学科の新入生オリエンテーションは、ABC体験を皮切りに「茶香服」体験（茶の味や香をもとに銘柄を当てるゲーム）、韓国の伝統的な子どもの遊び体験へとつづく「体験型」オリエンテーションとなり、多くの学生から好評を得た。

翌 2018 年度からは、日本文化学科の新入生オリエンテーションにおいて同様の ABC 体験を実施した。日本文化学科の恒例行事である「吉野合宿」初日の午前中に学内で実施し、小西がファシリテーターを担当した（なお、2020 年度は新型コロナウイルス感染拡大のため実施せず）。

3-3 河口担当演習系科目への導入

2017 年度より河口が文化創造学科ならびに日本文化学科文化創造コース⁸にて担当する演習系科目（1・2 年次演習、3・4 年次ゼミ）で ABC 体験を実施してきた（半期に 1 回程度）。1・2 年次演習ではアイスブレイキングに重点を置くのに対して、3・4 年次ゼミではチームビルディングに重点を置いている。1・2 年次の ABC 体験は通常授業の一環として実施するのに対し、3・4 年次のそれは通常授業と切り離し、学生たちの主体性喚起を意識して、あえて「自由参加」の形態をとるようにしている。

また、学年を越えて ABC 体験を実施することにより、異学年交流（「縦のつながり」）の活性化にも注力してきた。さらに、本学心理学部で ABC を学ぶ大学院生・学部生にアシスタント（ボランティア）を依頼することにより、学部間交流の機会をも提供してきた⁹。

2020 年度においては、新型コロナウイルス感染拡大を受けて、ウェブ会議システム (Zoom) を用いた ABC 体験（アイスブレイキングに重点）を実施した。具体的には、グループに分

かれての自己紹介、「絵しりとり」（言葉にせず絵だけで行なうしりとり）、「モノしりとり」（自宅にあるモノを取ってきて行なうしりとり）など、Zoom の特性を活かした様々なアクティビティを提供した。当初は「苦肉の策」として導入したものである



写真 2 「Zoom アドベンチャー」

⁸ 文化創造学科は 2017 年度入試をもって学生募集停止となり（2017 年度が最終学年）、2018 年度入試からは日本文化学科文化創造コースとしての学生募集となった。さらに、2021 年度入試からは日本文化学科地域文化発信コースに改称された。

⁹ アシスタントを担当した心理学部の学生が ABC の学習効果について卒業研究を行なった際には、河口担当演習系科目の受講生たちが被験者として協力した。

が、「Zoom アドベンチャー」には様々なメリットがあり、学生たちからは「自宅から参加できるので安心感がある」、「周囲の目が気にならず発言しやすい」、「グループ分けの際にグダグダにならなくて良い」、「お互いのマスクをしていない顔を見ることができてうれしい」といった好意的な声が多く聞かれた。

また、2020年度においては、河口担当3年次ゼミの取り組みとして、岡山にある就実大学の洪性奉担当3年次ゼミとの合同ゼミを初めて実施した。計画段階では夏季休暇期間に奈良で合同合宿を行なうことを想定していたが、新型コロナウイルス感染拡大を受けて中止せざるを得なくなり、やはり「苦肉の策」として、Zoomを用いた合同ゼミ（7月、10月、1月の計3回）を行なうこととした。7月に開催した第1回においては、小西のファシリテートによる「Zoom アドベンチャー」（アイスブレイキングに重点）を実施した。その後、10月開催の第2回においては、教員主導の企画（ゼミ対抗研究発表大会）、さらに1月開催の第3回においては、学生主体の企画（奈良 VS 岡山「お国自慢」大会、教員抜きの親睦会）をそれぞれ実施した。こうして、初年度の合同ゼミにおいては、最初のアイスブレイキングが効果を発揮し、教員主導型から学生主体型への移行が円滑に進むことになった。

3-4 その他の試験的な取り組み

2020年2月、文化創造学科2017年度生（当時3年生）を対象に、「就活支援アドベンチャー」と題した企画（小西のファシリテート、対面実施）を試験的に実施した。当日は学内企業合同説明会の初日に当たり、あえて説明会終了後の時間帯に設定した（やはり「自由参加」の形で）。発案者の河口が意図したのは、就職活動もまたアドベンチャーであり、就職活動の過程において「ピアサポート」（仲間同士の支えあい）がいかに重要であるかを学生たちに改めて意識させることにあった。同年6月には、就職活動中の文化創造学科2017年度生を対象に、Zoomを用いて「就活支援アドベンチャー」第2弾を実施し、「ピアサポート」再確認の場を提供した。

また、2021年3月、卒業を目前に控えた文化創造学科2017年度生を対象に、「卒業生追い出しアドベンチャー」と題した企画（小西のファシリテート、対面実施、「自由参加」）を試験的に実施した¹⁰。発案者の河口が意図したのは、学生たちに対して最も難易度の高いア

¹⁰ 過去のABC体験にてアシスタントを担当した本学心理科学研究科・心理学部の大学院生・学部生（全員が2020年度末に修了・卒業）も参加した。

クティビティである「パンパーポール」への挑戦を促すことにより（「チャレンジバイチョイス」の理念に則って、実際に挑戦するか否かは本人次第）、子どもから大人への「イニシエーション」（通過儀礼）を疑似体験させることにあった。



写真3 「パンパーポール」

4. アドベンチャーカウンセリング体験の効果—振り返りレポートを手掛かりに—

本節では、河口担当演習系科目での ABC 体験に参加した学生たちの振り返りレポート（体験を通してどのような「気づき」を得たのか）を手掛かりとして、体験が具体的にどのような効果を学生たちに及ぼすのかについて整理する。ここでは、特にアイスブレイキングに関する効果とチームビルディングに関する効果に注目する。

4-1 アイスブレイキングに関する効果

1・2 年次演習において重視されるアイスブレイキングは、誰しものが気楽に楽しめる簡易なアクティビティを用いることにより、学生たちをして、互いに関心をもち、もっと打ち解けたいと思わせる「仕掛け」である。これにより期待される効果は、演習クラスを先述の「コンフォートゾーン」（個々人にとって快適・安心な居場所）へ変容させる、いうことに他ならない。

次の 2 つの文章では、体験を通してクラスメイトとの関係に安心感を得ることになった学生の心境変化が具体的に示されている。

「コミュニケーションをとることは難しいと思い込んで、自分には無理だと決めつけていたけど、話してみると人とかかわりをもつことはとても楽しくて、話せる人が増えるだけで安心感もちました。遊びを通してだと自分から話しかけられるのにそれ以外の時は相手から話しかけられるのを待ってしまっているところを直さないといけないことに気づきました。」

「アドベンチャーカウンセリングを体験して、他人とかかわることは大切なんだと思いました。体験の後、あるクラスメイトと別の授業で一緒になった時に一言あいさつを交わしました。その時、他人でいたら楽だけど、知り合いになると、安心できるということがわかりました。これは小西先生が仰っていたことにも通ずるのかなと思います。ですが、こういう場があったから、その授業が終わった直後だったから、難なくしゃべることができたのだと思います。この次が大事だと思うので、来週以降は知り合いから友達になれるようにがんばります。」

次の文章では、ABC 体験をきっかけとして、クラス全体が「コンフォートゾーン」に変容していく様子が具体的に示されている。

「アドベンチャー体験の概要を聞いたときは、どんな人がいるんだろうと胸が高鳴ると同時に、少し不安感を抱きました。なぜ不安感を抱いたのかというと、この2年演習は少数にもかかわらず何となくよそよそしい感じが授業中に漂っていたからです。さらに見知らぬ人たち(先輩)が入ればもっとよそよそしい感じが出てしまって、全体がそういう雰囲気になってしまい、楽しめないのではないかと思っていました。…(略)… そんななかでアドベンチャー体験がはじまってしまいました。最初のじゃんけんゲームは何が何だかわからないま



写真4 アイスブレイキング①



写真5 アイスブレイキング②

まじゃんけんをしつづけただけなのですが、自分の緊張が少しずつ溶けていった気がしました。また自分の緊張だけではなく、全体の雰囲気は柔らかくなったと感じました。とても簡単なゲームでこんなにもすぐに結果が出るのに、疑問を抱き、人間っておもしろいなと改めて思いました。… (略) … アドベンチャー体験を終えての初授業は、みんなが話せる和やかな雰囲気が少しでき、嬉しかったです。」

また、同じクラスに属する留学生と日本人学生の間「心の壁」に対してもアイスブレイキング効果を期待することができる。次の文章では、「Zoom アドベンチャー」に参加した留学生の心境変化が具体的に示されている。

「最初はちょっと緊張しましたが、簡単なゲームで段々リラックスし、みんなとの距離も近くなったと思います。ビンゴゲームの時、留学生である私はルールを知らなかったもので、クラスメイトが熱心に教えてくれました。すごく感動しました。最後の『絵しりとり』ゲームはとても面白かったです。日本語の単語がなかなか出てこなくて、私のせいで、なかなか進みませんでした。でも先生やチームメイトは全然焦らない。一緒に笑って、楽しい時間を過ごしました。私にとってこのゲームは面白いだけじゃない。みんなの優しさに感動しました。実は、留学生にとって日本人の友達をつくるのはとても難しいことです。みんなと一緒に笑う時間は私にとって本当に貴重な経験でした。」

4-2 チームビルディングに関する効果

3・4年次ゼミで重視されるチームビルディングは、難易度の高いハイエレメント系アクティビティ¹¹を活用することにより、個々の学生をして、互いに支え合いながら、皆で1つの目標に挑戦してみたいと思わせる「仕掛け」である（ここで重要な意味をもつのが「フルバリューコントラクト」と「チャレンジバイチョイス」の理念である）。これにより期待される効果は、「群れ合い」（同調行動）ではなく、ある目標に向かって個々のメンバーが自立的に協調・役割分担するチームが形成される、ということに他ならない。換言すると、それは、先述の「自己組織化された共同体」の疑似体験といえよう。

以下にあげる4つの文章では、まさに「自己組織化された共同体」を疑似体験することに

¹¹ ハイエレメントとは、専用の実習施設にて専用の器具類（ロープ、ハーネス等）を用いて安全を確保しながら行なう身体的・心理的リスクの高いアクティビティのことを指す。

なった学生たちの心境変化が具体的に示されている。前半の2つは、ハイエレメント系アクティビティに果敢に挑戦した学生たちの振り返りである。

「今回は、仲間同士の助け合い、チームワークに重きをおいた、新しいグループカウンセリング法で、今後必要になるチームワークについて考えるきっかけをつくる、というものでした。私自身、最近初めて就活イベントに参加したのですが、いきなり初対面の人たちとグループを組み、話し合いを進めていかなければならない状況にタ

ジタジだったので、今回の体験はピッタリでした。一番印象に残ったのは『クライミングウォール』。やはりインパクトが強かったのと、一番仲間を信頼しなければいけないものだったからです。安全確保は、仲間の体につなげてもらった1本のロープだけ。そのロープは他の仲間の3人で引っ張ってはいるけれど、もし手を離してしまったら、重さに耐えきれなくなって引きずられてしまったら、怖いシミュレーションをはじめたらキリがありませんでした。しかし、このゼミメンバーなら大丈夫。そう確信し、一番手に名乗り出ました。防具を装着し、登りはじめてみると、安全確保だけでなく、仲間たちの的確な指示がたくさん飛んできて心強くなり、みんなのおかげでスイスイと登っていくことができました。最上部までたどり着いた証となる鈴を鳴らしたとき、いつもバラバラなゼミメンバーがひとつになれた気がしました。 チームワークのつくり方、そして信頼。この体



写真6 明文化された「フルバリューコントラクト」



写真7 ハーネスの着用

験で私はとても大きなものを得ることができました。」

「今回のアドベンチャー体験を通して、相手をよく見ることや声掛けをすることの大切さを学びました。チームで協力するためには、声を発することで周りの人に自分の存在を伝える必要があると思います。特にその必要性が感じられたのは、『クライミングウォール』のときでした。周りの人に自分の命綱を預けている分、周りの人が声をかけてくれるだけで、いざという時も大丈夫だと思うことができました。また、声をかけてあげることで、全体の士気が上がりチームの雰囲気により良くなると思いました。これ



写真8 「クライミングウォール」①

は A さんを見て感じました。壁を登っている最中の人に、足の置きやすいところを教えてあげたりと、よく周りの人に声をかけていました。彼女のような人が一人いるだけで、場の空気が明るくなり、ポジティブな一体感が生まれると感じました。また、全員が



写真9 「クライミングウォール」②

前が出るのではなく、縁の下の力持ちのような役割をしっかりとこなしてくれる人もいて、そのメンバーのおかげで安全にクライミングをやれているのだと感じました。特に B 君は力がある大変なポジションを多く担当してくれたり、前に出て目立つことはしなくてもチームの支えのような役割を担ってくれていました。」

一方、後半の2つは、支える側に回った学生たちの振り返りである。

「今回のメインである『手つなぎトラバース』は、前回の『クライミングウォール』とは比にならないほどの高さで心許なさで、下から見ていただけの私でも、手に汗握る体験でした。この『手つなぎトラバース』では、実際にワイヤーの上を歩く挑戦者の2人に目が行きがちですが、上に行かずとも下から2人を支えるメンバーもみんなとても大事な役割を担っていたと思います。思い切り踏ん張って命綱をもつことも、挑戦者が登るたびにゆらゆらと動くハシゴを支えることも、ペアの2人の様子を見ながら助言や激励を行なうことも、何ひとつ欠かすことはできないと感じたからです。上に登ったメンバーと下から見守っていたメンバーとでは、そこから得た経験や見た景色は異なりますが、どのポジションにいたメンバーにとっても、『相手を思いやって行動する』ことが『手つなぎトラバース』を無事に成功させる上で大切なポイントになっていたのではないかと思います。私自身はその高さにおじけづいてしまっても上まで行くことはしませんでした。毎回違った役割を担うことで、その場所によって多少異なる責任を感じながら、いつも新鮮な気持ちで楽しむことができました。つい1時間前まではよそよそしかったメンバーも、同じ体験を共有することによって、自然にコミュニケーションを取ることができたように思います。」



写真10 「手つなぎトラバース」①



写真11 「手つなぎトラバース」②

「一番の目玉である『手つなぎトラバース』を私はしていませんが、命綱をもたせてもら

いました。手は片時も放せませんでした。視線は上を向いています。というより、見ないと補助できません。なので、ワイヤーを渡る人たちの観察をすることができました。体験したことがないこと、さらにそれが肝を冷やすような非日常的な体験だった場合、人は真剣になるのだと思います。軽口をたたくことはあっても、それは場を和ませるための発言であり、人が傷つくような言葉は一切ありませんでした。本音が出ていたような発言もありましたが、それもまたお互いの関係を築くのには良いことなのだと感じました。人との関係を築くには、心を開くことが必要です。話し合うことも大事ですが、心の距離は身体の距離を縮めることで一緒に縮まることもあるのだと、この体験を通してわかりました。話し合うということは頭で言葉を選ぶということ。しかし、この体験では思考する時間などなかなかくれません。そうすると人は最善の道を選びます。その人の人となりでそこで少し露見します。つまり、それは裏表がないということになります。この体験では、『考えるより行動』を実践することで、人との目に見える距離、目に見えない距離を狭めることができました。』

4-3 体験によって喚起された学生たちの哲学的探求

ABC 体験は、アイスブレイク重点型にせよ、チームビルディング重点型にせよ、積極的にコミットメントする学生たちに様々な「気づき」をもたらしてきた。なかには、体験によって知的探求心を掻き立てられ、高度な哲学的思考にたどり着く学生も見られた。

次の文章は、ABC 体験を通して日常の「空気」(同調圧力)から解き放たれ、1つの自己理解に到達した学生の心境変化を具体的に示すものである。

「何でも少し外れたところから見るのが好きな私にとって、アドベンチャーカウンセリングは修行のような場であったと思う。そこにいるのは誰でもなく自分で、求められているのは人の動きを見ることではなく、自分が動くことであり、それはこの場において『正しいこと』であった。何が正しくて間違っているのかわからないのが日常だが、この場においてはそれが正しいこととして許されていた。そういう場はめったにないし、だからこそよくわからなくて不安な気持ちにもなった。逃げていても何も言われぬ、むしろ逃げた方が評価されるのが日常なのに、ここではそれが通用しなかった。挑戦しても誰も文句言ったりしないし、茶化したりしない。そんな変な場はめったにない。そこで気がついた。私は多分本当は高いところとか大好きである。そのことに気がついたのが私にとってのアドベンチャーカウンセリングだったのだと思う。』

次の文章は、ABC の体験学習の特徴（学びと遊びがシームレスに一体化）を見抜くとともに、「主体的に楽しむ」意欲をもつことの大切さについて内省するものである。それは、まさに「遊戯三昧」（禅語）の境地であるといえよう。

「普段の大学生活のなかで行なうグループワークは、『完成した結果』を人に見てもらい形が多いため、『自分が役割を担わなくても、誰かがやってくれる』という考えを、誰もが少しはもっているだろう。その結果、完成までの『過程』においてグループ内で担う役割に偏りが生じ、目的や求める完成度にも個人差が出てしまうのだろう。しかし、今回のアドベンチャー体験では、『安全に真剣に、楽しむ』ということを目的として、複数のミッションに取り組んだ。それぞれに得意や不得意はあったが、誰もが苦手を負担に感じさせない方法を考えたことから、楽しみながらミッションにチャレンジできる空気がつくられていたと感じた。苦手なことを無理して挑戦する必要はないかもしれないが、その場の良い空気感に勢いで乗って、物事に挑戦していくことは、結果がどうであれ楽しかった記憶として残るのではないかと思った。これらのことから、与えられた課題や環境を何でも苦だと考えるのではなく、自分自身が楽しむ気持ちをもつことで、変わってくる環境は多くあるのではないかということに、改めて気付くことができた。」

次の文章は、有名な故事成語「百聞は一見に如かず」の含意に触れながら、「主体的に人とかかわる」とはいかなることであるかについて内省するものである。

「今回、『ジャイアントラダー』に挑戦しましたが、最初は見る側に徹しようと決めていました。しかし、ペアの子が登りたいと言ったので、これは断れないと思い登りました。

そして、気づいたことですが、このときの私には嫌で仕方がないというような思いはなく、反対にどこか楽しんでいた節がありました。自分一人では心は動かないということなのでしょう。自分じゃない誰かは、自分が成長もしくは変



写真 12 「ジャイアントラダー」

化するために必要不可欠な存在です。挑戦する前の凝り固まっていた先入観を、実際に見てみることで変えたのだと思います。『百聞は一見に如かず』とはまさにこのこと。この諺にはつづきがあります。つまり、聞いて見て考えて行動して成果を出して、それは自分だけでなくみんなの幸せにつながらなければならない、ということです。この諺が意味することの一端を体験できるのがアドベンチャーカウンセリングであると私は感じました。
何事にもどこかしら興味をもち、挑戦すること。そこには必ず自分ではない誰かが存在するのだという意識を、常にもっておこうと思いました。 常日頃というのは無理かもしれませんが、意識しようと心掛けるきっかけをつくれました。」

次の文章は、ABCにとどまらず、大学の学びはどうあるべきかという大きな問いに対する1つの有効な解であるといえよう。

「前回（半年前）のアドベンチャー体験では、参加することでいろんな恩恵（楽しさ、仲間意識、信頼など）を受けられると思った。しかし、今回の体験を通して、それは大きな勘違いだったことに気づかされた。そうではなく、アドベンチャーカウンセリングはみんなのでつくりあげていくものなのだ。『ジャイアントラダー』では、2人1組で互いに協力し合いながら上に登るが、それに加えて、周りで見守る人たちが客観的に様子を見ながらアドバイスを送る。そしてパニック状態に陥った挑戦者を見て、みんなで笑い飛ばす。見ている人がいてこそその楽しい空間なのだと思う。」

「みんなのでつくりあげていくもの」というフレーズは、非常にシンプルな表現であるが、ABCの学びの本質を突いているといえよう。そこでは、教員はあくまでもファシリテーターであり、教員と学生の間には主従の関係などありえない。そこで行なわれるのは、教員と学生の双方が主体となる「共育」・「協育」に他ならない。それは、まさに河口がゼミ活動やプロジェクト活動のなかで模索してきたものである。



写真 13 ABC 体験恒例の締めくくり「儀式」

文化創造学科 2017 年度生（当学科最終学年）は、入学当初より 4 年間にわたって様々な ABC 体験に参加してきた。彼・彼女らは、「ラスト文創」と自称するほどに所属学科へのアイデンティティを強くもち、早い時期から様々なプロジェクト活動に積極的に取り組んできた。その 1 つである拝観券ホルダー「券葉集」開発プロジェクトは、まさに「みんなで作ってあげていくもの」を体現したものであり、文化創造学科の学びの集大成となった¹²。

5. 結びに代えて

以上では、文学部における ABC の導入経緯、具体的な取り組みの概要、その学習効果について整理した。本節では、今後の文学部における ABC の活用実践の可能性と課題について展望し、結びに代えたい。

河口担当演習系科目での ABC 体験に関しては、すでにある程度のフォーマットができつつあり、着実に効果が上がっているが、今後においても現状に甘んじることなく、さらなる発展の可能性を模索していきたいと考えている。現時点において河口が特に大きな課題とみなしているのが、異学年交流の活性化をいかに図るか、そして、体験に参加しようとする学生に対していかにフォローするか、の 2 点である。

前者に関しては、過去 4 年間に何度も異学年合同による ABC 体験を実施しており、その場においては総じて先輩・後輩間の友好的・協調的な関係が見られるようになるものの、それが体験終了後において継続・発展したかという点、残念ながら、多くの場合、そうはならなかった。今後は、ABC 体験においてもゼミ活動やプロジェクト活動においても「縦のつながり」を学生たちに意識させる「仕掛け」を積極的に講じていきたいと考えている。

一方、後者に関しては、ABC 体験に参加するかどうかを学生個々の自由意思にゆだねる（強制しない）という方針をとると、どうしても参加しようとする学生が一定数現れることになり、ABC 体験を実施すればするほど、参加する者と参加しない者の「温度差」が大きくなってしまおうというジレンマが生じる。残念ながら、この課題に関しては、現時点では有効な解決策を見出せていないが、今後は、河口担当演習系科目の通常授業のなかに ABC 的な学びの要素をいっそう積極的に取り込むことにより、「温度差」の抑制、参加意欲の低い学生へのフォローに努めたいと考えている。

¹² 「券葉集」開発プロジェクトについて詳しくは、河口（2021）を参照されたい。

また、試験的に実施した「就活支援アドベンチャー」、「卒業生追い出しアドベンチャー」に関しては、現時点ではどのような効果があったのかを検証できていないが、今後、体験者からのフィードバックならびに未体験者（今後の対象者）の要望を踏まえつつ、企画のブラッシュアップを図っていきたい。

さらに、新たな取り組みとして、在学中に ABC の学びに触れた卒業生と現役生の交流企画（「ホームカミングアドベンチャー」）や、本学とつながりの深い地元の企業や NPO、高等学校などと現役生の ABC 交流企画（「地域連携アドベンチャー」「高大連携アドベンチャー」）といった案を検討している。近い将来、こうした前例のない企画案にも積極的に挑戦したいと考えている。

過去 4 年間に河口が企画した ABC 体験は、すべて専門家である関や小西の協力によって成立したものである。今後、本学における ABC 教育のさらなる普及・発展を目指すなら、学内において希少な存在である専門家への依存を弱めるとともに、「内製化」（自らファシリテートできるようになること）に努める必要があると、河口は考えている。これを今後 3 年間の目標としたい。

本稿は、2017 年度にはじまる文学部（主に文化創造学科および日本文化学科文化創造コース）での ABC の活用実践をめぐる、4 年目を終えた時点での成果報告である。あくまでも予備的な報告であり、その効果に関する記述・考察は不完全なものにとどまっているといわざるを得ない。今後も文学部での ABC の活用実践を継続・発展させながら、本稿での検討内容をいっそうブラッシュアップさせ、3 年後ぐらいを目途に改めて成果報告を行なう予定である。その際には、卒業生へのヒアリングにより、在学中の ABC 体験が卒業後のキャリアライフにどのような影響を及ぼすことになったのかという点についても検討したいと考えている。

【参考文献】

川合悟・小西浩嗣（2009）「アドベンチャーカウンセリングの実践」蓮花一己・三木善彦編

『こころのケアとサポートの教育—大学と地域の協同』帝塚山大学出版会、pp.45～72。

河口充勇（2007）「フィールドワークの教育効果」『同志社社会学研究』（同志社社会学研究会）第 11 号、pp.67～79。

——（2021）「地域連携によるプロジェクト型学習の可能性と課題—文化創造学科の 7 年を振り返って」『帝塚山大学文学部紀要』第 42 号、pp.106～90。

小西浩嗣（2021）「授業カリキュラムにおけるアドベンチャーカウンセリングの実践－導入からこれまでの取り組みについての報告」『人間環境科学』（帝塚山大学人間環境科学研究所）第 28 巻（印刷中）。

松村真宏（2016）『仕掛学－人を動かすアイデアのつくり方』東洋経済新報社。